

SEMINAIRE OUVERT PERMANENT

mars 2006

セミナー通信 2006年3月

公開セミナー『心的構造論』 藤田博史 (精神分析医)

第37回第37講「精神病的構造的治療理論とその治療技法 (25)」

2006年3月11日(土) 13:30-16:30 (開場時間も13:30になります)

第38回第38講「精神病的構造的治療理論とその治療技法 (26)」

2006年4月8日(土) 13:30-16:30 (開場時間も13:30になります)

第39回第39講「精神病的構造的治療理論とその治療技法 (27)」

2006年5月13日(土) 13:30-16:30 (開場時間も13:30になります)

会場: 日仏会館 509号室 聴講料:1000円

日仏会館 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 JR 恵比寿駅東口から「動く歩道」経由で徒歩 10分

主催: ユーロクリニック 協賛: ドール・フォーラム・ジャパン

問合せ先: ユーロクリニック文化部 TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

FUJITA, Hiroshi (psychiatre-psychanalyste)

Le 37ème SÉMINAIRE samedi 11 mars 2006-----13h30-16h30

Le 38ème SÉMINAIRE samedi 8 avril 2006-----13h30-16h30

Le 39ème SÉMINAIRE samedi 13 mai 2006-----13h30-16h30

SALLE#509 DE LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

Frais de participation :1000yen LA MAISON FRANCO-JAPONAISE

10 min.à pied depuis la Sortie Est de la Gare d'Ebisu(ligne JR Yamanote)

Organisation:L'EUROCLINIQUE Collaboration:DOLL FORUM JAPAN

Renseignements: DIVISION CULTURELLE DE L'EUROCLINIQUE

TEL: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

発行
EUROCLINIQUE
編集
ユーロクリニック文化部

	目次		
公開セミナー案内	1	『ブレーキを踏もう』 佐藤良平	5
『セミナー断章』 藤田博史講義	2	ヨーロッパ美術紀行 清水由美子	6
	3	ユーロクリニック案内	7
心の問題を構造から考える 水上雅俊	4	マンスリー連続対談案内	8

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

公開セミナー『心的構造論』より

「セミナー断章」

講義 藤田博史 編集 榊山裕子

Séminaire privé トピカ 112 「性関係は存在しない」より

jeudi 17 novembre 2005 2005年11月17日(木) クレマスター (東京・新宿)

今回は、先回に引き続き、公開セミナーからの抜粋ではなく、月1回の日仏会館での公開セミナーとは別に、毎週木曜日、新宿・クレマスターで開催されている藤田博史のプライベートゼミ、フジタゼミで行なわれた講義より抜粋します。

この講義は、聴講者に論点提出をしていただき、藤田及び聴講者全員で自由に討議する「トピカ」より、2005年11月17日に行なわれたトピカ112 (30分) 小山太郎氏 (湘南短期大学) テーマ「性関係は存在しない」>として行なわれたものです。興味深い論点を提出してくださった小山氏に感謝します。

Contents

- 先号 1) 性別化の論理式
 - a 性別化の論理式
 - b 古典主義論理と直観主義論理

- 今号 c 男性と非=男性
 - 2) ファンタズムのベクトル

c 男性と非=男性

男女の区別には、もちろん生物学的な区別はあります。「男の子ですか、女の子ですか」と聞かれた時に、おチンチンがついていたら「あっ、男の子です」、ついていなかったら「女の子です」と生物学的にその場で男とか女とかを決めます。しかし Testicular feminization syndrome などのように、実はレセプターが欠如しているために外性器がたまたま女性になっただけで本来は染色体はXY型という人もいますわけですから、生物学的にもちょっとあやふやです。パッと見ておちんちんがあるかないかで、そのまま百パーセント男女の区別をできるかという、できないのです。

それとはまた別に人間の世界では「性倒錯」と呼ばれている人たちがいる。男性として染色体がXY、社会的にも男性として生まれてきた人が自らの性と逆の性を選択するということが起こるわけです。「自分は女性である」「女性と同じである」、つまり「何々と同じ」と見なす人たちがいる。それは「性」にはわれわれが言葉を話す故に決定されているもうひとつの水準がある、ということです。つまり象徴的なレベル、「言葉を話す」という水準でもまた男女の「性」が決定されているという事実があります。

今ここで問題にしているのは言葉を「話す主体」です。男女の性の区別を考慮しない場合はわれわれはすべて「話す主体 sujet parlant」でしょう。言葉を「話す主体」が象徴のレベルにおいて男女の区別を行なっているとすれば、それはどういうシステムによってか、という数学的な問題なのです。その時に問題になるのが「話さない主体 sujet non-parlant」から「話す主体 sujet parlant」になるきっかけは何だったのかということです。その時に重要になるのが最初に身体の中に取り入れたであろう「シニフィアン signifiant」です。つまり第一番目に身体の中に取り入れたであろうシニフィアンがひとつの鍵を握っているのだということです。そのシニフィアンを身体の中にとり入れたがためにすべての幸福と不幸がはじまった。人間として独自の意味を歩むようになったのです。その最初に取り入れたシニフィアンが実はその後に取り入れたシニフィアンに対してある影響を及ぼしていると想定せざるを得ないような形で、シニフィアンは意味作用を持っている。つまり全ての言葉は何らかの意味を持っている。その意味の元になっている核として最初に取り入れたシニフィアンがどうも作用しているらしい。それは特にフロイトの「抑圧」の研究からわかってきたことです。

最初にシニフィアンが取り入れられる事態を、フロイトは「原抑圧 Urverdrängung」と呼びました。その後起こってくるのを「後期抑圧 Nachverdrängung」、Ur とNachという言葉で区別していますが、その後期抑圧は何らかの形で「最初に抑圧されたものの引力を受けている」という言い方をフロイトはしています。ここにフロイトの天才がある。耐え難き現実からただ打ち消す、消し去るという力、意識の外に耐え難きものを追いやるだけでは「抑圧」を想定するには不十分であって、最初に取り込まれたものが何らかの「引力」を及ぼしていると想定せざるを得ない。それがフロイトの論文が「ファルスの意味作用」に重なるところなのでしょう。まずその引力の及ぼされ方の違いがあるということになります。男とか女とか象徴界の中で区別されていく時に、その「ファルスの意味作用」の及び方がどうもその後のシニフィアンに対して違うのだということです。どういう風に違うかと言うと、その時は違くて「体験としての去勢」と「象徴界で起こった去勢」とが・・・ダブルイメージというか・・・そこで重なる。

何が起こるかという男の子は「おちんちん切っちゃうぞ」と言われる。「おちんちんが切られる」という不安がある。「おちんちんが切られる」というのはどういうことかというそれは「母と永遠に合体しちゃうぞ」という掟なのです。「ママといつまでもいちゃいちゃするな、この馬鹿!」「そこは俺の場所だ。お前のおちんちんをママに使ってはいけない!」と父親が介入してくるわけです。母との近親相姦がそこで完全に遮断される。つまり完全に遮断されているか否か、ということがポイントなのですが、男の子の場合は完全に遮断されるわけです。

ところが女の子の場合はそこに父親が入ってきた時に不思議なことが起こるのです。女と女同士だから本当は別に遮断する必要はないわけでしょう。ところがそこで父親が割って入った時に別の事態が起こるわけです。「あ、パパのおちんちん」と、こういう感じですね。「わたしにはない、パパにはある。パパ見せて」とそうやってしまうわけです。要するに一方ではペニスを切られるという恐怖。もう一方ではペニスに対する憧れ。二つのまったく違った道が生じてしまう。

ところが象徴界で起こっているのは依然として男の場合も女の場合も言語を獲得してしゃべっていく、ということです。そこに現実

の体験が重なる。つまり男の子の場合は父親がなかに完全に入って来る。その父と最初のシニフィアンを同等のものとみなしてしまう。そういうメカニズムが生じるわけです。つまり父のポジションと最初に取り入れたファルスとを同等のものとみなしてしまう。

女の子の場合は、父がそこに割り込んできた時にやや複雑なメカニズムが起こるわけです。なにかというと女の子の幻想の中にも「ママの股間にペニスがある」という幻想があるわけです。ですから本来は「ママの股間にペニスがある。だからペニスがあの陰毛の茂みから出たり入ったり、出たり入ったりしている」という幻想を抱いている子供もいます。いずれにしても女の子の場合はファルスの機能が非常に曖昧な規定のされ方をするのです。一つは男の子のように「母親と自分との一体化は永遠に妨げられる」ということです。そこへ割り込んできた父親のペニスが、本来はやはり母親の場所にあるはずのものと同じ視される。ここがちょっと複雑なのです。つまり父が入ってきた、入ってきたらそのまま父が最初のシニフィアンになるのではなくてワンクッションあるのです。父のおちんちんは本来は母の股間にあるべきものであって、その母の股間にあるべきものが実は最初に抑圧されたシニフィアンに通じている、と、そういう迂回路を経ている。

だから男の子の場合は「父のおちんちんイコールファルス」。女の子の場合は「父のおちんちんを通した母の股間に本来あるべきものがファルスと同等のもの」と、そういうちょっと回りくどいメカニズムなのです。それがそのまま象徴界のなかで形作られる。つまり女の子の場合は「目に見えるファリックなもの」と「ファリックなもの」の二つの支配下に置かれるというか、その二つの間で揺れている。つまりどういうことかという「ママの股間にあるはずのおちんちん」にも憧れ、実際の目の前にある「おとうさんのおちんちん」にも憧れる。象徴界の意味作用が二分されている、というか・・・そこに「女性の謎」があるのです。

だからおとうさんのおちんちんに憧れているという意味では、非常によく規則を守ったり、目に従順であったり、社会性を備えた女性であり得ると同時に、目に見えないおちんちんを基準にしている場合は、逆にいえば実際に失うものがないので法律とか規則とかを無視できる。だから女性の二側面というのは非常に面白い。一方で非常に社会規範とか命令とかを従順に聞きつつそれを「無化 néantisation」している。「そんなものどうでもいいのよ」と思っている。そこに女性の領域の二面性がある。女性にとってファリックなものには二つの意味があるのです。

一応ファリックなものを通して見ているから、母親の股間に本来あるべきもの・・・それはおちんちんではないかもしれない、何かもっと別のものかもしれませんが・・・そこに何かがあると想定されるもの、おちんちんのようなものであるかもしれないけれども何であると言えないような何ものか・・・それはこの論理式で表せばS(A)です。前者(Φ)は非常にわかりやすい。女性で言えばペニスナイトとかそういうものに通じているのですが、一方でペニスナイトを持つつつアナーキストというか虚無的な部分を持っている。本当はどうでもいいと思っている。恋人のことを「好きよ」とか言いながら本当はどうでもいいのよ、と思っている(笑)。「無化 néantisation」とか「白痴 idiot」とかそういう言葉は、女性の謎を探っていくうえでキーワードになると思います。

(図1) 語る存在 êtres parlants

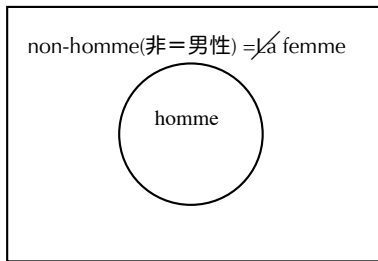
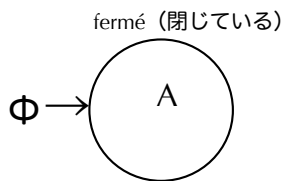


図2 homme(男)



2 ファンタズムのヴェクトル

K (小山) 「女性のファンタズムと男性のファンタズムは常にすれ違い続い続ける」というところからも「性関係は存在しない」ということは言えるものなのでしょうか。

F (藤田) ファンタズムの考え方と言っても二段階に分けて考えなければいけないわけで「話す存在」「話す主体」としてのファンタズムは一つです。それは有名な $\$ \diamond a$ (ファンタズムの式) です。これは男女の区別なく「話す主体 sujet parlant」「話す存在 être parlant」の抱えているファンタズムです。これを前提とした上で女性の場合と男性の場合は違うのです。何が違うかという、この「ポワゾン ◇」の部分が違う。これを分解して描くと、

$$\$ \rightarrow S1 \rightarrow S2 \rightarrow a$$

S1を「グランフィー Φ」とみなすならば、女性の場合は、このS1のところ「S (A) 大文字の他者における欠如のシニフィアン」、そしてS2は男女ともに「A 大文字の他者」です。S1のところが違うのです。つまり女性の領野はファルス(Φ)と積極的に呼べるようなシニフィアンとしてはあり得ない。シニフィアンの核にあるものが「大文字の他者の中で欠如しているなものか」、ゲーデルの不完全性定理に通じるようなものかなのです。ある数学的に無矛盾な公理系のなかではそのなかに積極的にあるともないとも言えるような領域が存在する、というのは1931年にクルト・ゲーデルが証明した事実です。そういうシニフィアンの領野としての、あるともないとも積極的に言えない穴みたいなもの。これ(図1)が穴の縁みたいなものです。言ってみればこれが穴の縁で、これが穴。わたしが作った図は四角で囲っていますが、これが無限な宇宙だとしたら、この宇宙に線が入ることで二つの領域に区切られてしまう。一つはこの円の内部、一つは円の外部。これを二つの部分に分けてみれば、円(図2)とそれ以外の部分(図3)になる。円の縁だった部分、これは線ではないから、この境界線の線の部分をΦ(グランフィー grand phi)と呼べば、ここの点々で描いた部分(図3)はS(A)としか表現できないようななものかなのです。そして「A」、ここはどちらも(図2及び図3)「大文字の他者」です。

フロイト＝ラカンの論理においては、最初に取り込まれたシニフィアンがやはり一つの大きな問題になる。最初に取り込まれたシニフィアンとその後に盛り込まれたシニフィアンが「A 大文字の他者」と呼ばれる。それが性別を決定している。分解するというなら「Φ grand phi グランフィー」が占めているものを男性と呼び、「Φ grand phi グランフィー」に似て非なるもの、すなわち「S(A) 大文字の他者における欠如のシニフィアン」・・・非常に逆説的な言い方です。シニフィアンなきシニフィアンが隠喩の核となっている・・・を「女性」と呼ぶ。

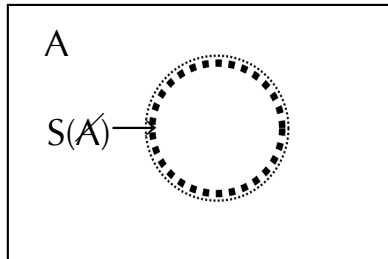
もっと分解すれば、この「A 大文字の他者 grand A」に関していえば、男性の領域(図2)の「A 大文字の他者」は「fermé 閉じている」。こちら(図3)は「開いている ouvert」。

これは言ってみれば有限/無限、有限集合/無限集合、と言ってもいい。だからこちら(図2)は排中律が成立する。こちら(図3)は排中律が不成立。おそらくそういう意味でこちら(図2)が古典論理の世界だとするならば、女性の領野に対しては直観主義論理がふさわしいと言えるでしょう。

図3

non-homme
(非＝男性)
(女性)

ouvert
(開いている)



心の問題を構造から考える

水上雅敏

連載 1 情動の教育より言葉の連鎖を

文科省のホームページによると、いわゆる「キれる」子の増加などから、昨年10月、文科省により「情動の科学的解明と教育等への応用に関する検討会」が開かれたらしい。提言を一部抜粋・要約すると、①子供の心の健全な発達には基本的生活リズムや食育が重要、②安定した自己形成には他者の存在、特に保護者の役割が重要、③情動は、5歳位迄に原型が形成されると考えられる為、情動の健全な発達には乳幼児教育が重要、等とある<註1>。

気になるのは、子供が言葉を持つ一つの独立した主体であるという観点から、これらには余り見えてこないことである。最初から子供は既に言葉を持つ主体であって、自ら考え選択し意思を表明しうる存在である筈だ。又、そのような存在として関ることが、その子を一つの主体として尊重していることになると思う。

しかし、ここでは子供の情動(この検討会でのその定義から部分的に抜粋すると、「怒り・喜び・悲しみ・憎しみなどのような一時的な感情の動き(後略)」)は、大人の理想—「健全な情動」—に合わせて育まれ修正されるべきもの、基本的にはこのようにしか読めない。

情動は、子を言葉を持つ主体として認めるということとは無関係に、教育されるしかないものだろうか。言葉と情動とは無関係なのだろうか。

話題となっている「キれる」という状態を取り上げてみたい。定義は一般的な了解に任せるが、この「キれる」とは細かく見るとどういう過程だろう。振り返ってみると、相手に言葉で言い返せなくなった、しかし怒りが抑えきれない、そこで相手を破壊する行動へ移ってしまう、凡そこのようなものだろう。結局問題は言葉の連鎖がそれこそ「切れ」てしまうことではないか。相手への言葉の連鎖が。又、怒りを怒りとして意識させてくれつつ、そうすることで、自分をどうにか破壊的衝動と一体化することから距離をとらせてくれたはずの自分の中の言葉の連鎖が。であれば、言葉の連鎖を強めればそれで済むことではなからうか。「しかし基となっている怒りそのものではないか。」と言われるかもしれない。しかし、「怒り」を「人や現実が思うままにならない時に出てくる反応」と考えてみよう。ここには、人や現実が自分の思うままになるはずだという鏡像的な前提が在る。言い換えると、自分と他者(いわゆる現実も含め)の間の隙間の否認が覗える。そうすると、またしても言葉の問題である。なぜならば、言葉こそが、それ自体が不完全、つまりいつまで語っても世界を完全には現出させ得ないことによって、無一つまりここで言う隙間—の概念を人にもたらし得るものだからである。こういう言葉の連鎖がその人に元々有って、他者は自分と違うと分かっていたら、ここで怒りが湧くまでもなかったのである。結局ここでも、怒りに直接アプローチするまでもなく、言葉の連鎖を進めておけばよかったのだ、ということになる。

情動そのものを取り上げよう。そもそも言葉こそが物事を分節化し—と言うと「物事」を実在化させてしまうので、より無難には差異の差異化を連続させ、と言うべきだろう—、人間に意識を与えていると認めるならば、情動も「感じられるもの」だから言葉に関わっているに違いないのだ。まず、語や文そのものは情動ではない—「悲しい」が悲しさそのものを伝え切ってはいない—から、情動は、

その起源は、言葉にとって、その穴としか言えない何か—実体化できないが—である。そして情動という「感じ」は、私見ではあるが、その穴を埋めきれないが埋めよう(意味づけよう)として巡り来る様々な言葉(丁度ワインの味を伝えるソムリエの様々な言葉のような。ワインの味に相当するような知覚が情動の起源近くにも在るものかはわからないが。)、それに触発された身体感覚の連想、あるいはそういう言葉と穴との対立する反復リズムの感覚(これ自体も言葉で差異化されてあるはずだ)、或いはこれらの複合としてしか考えられず、このような意味で、最初から最後まで情動は言葉と関っているとしか考えられないのだ。フロイトによる情動の定義を、ラランシュとポンタリスは「欲動エネルギー量の主観的翻訳」とまとめたが<註2>、ここでも情動には言葉が関わっていることが窺える(この欲動エネルギー量—フロイトは実在化させているわけではなからう—が上で語ってきた「言葉の穴としてしか言えない何か」に相当しよう。)。検討会の問題視する「キれる」状態は、こういう言葉の連鎖を面倒がり排除した「情動」ならざる「行為への移行」に近いものではないか。「怒り」も、「思うがままにならない現実に対する悲哀の情動」というレベルで自己内で静かに編むべきであった言葉の連鎖を一段階避けて形成した非本来的な情動と考えると、検討会の言う「健全」な情動は、「言葉の連鎖の豊かな情動」と置き直して考えられるのではないか。やはり、言葉の連鎖を進めることが、こう考えても第一なのではないか。

誰も人の心を教育する権利は持たないだろう。しかし、言葉の連鎖を邪魔しない、あるいは補助する教育は、この倫理に抵触すまい。ここで言う言葉の連鎖とは、「未だ語っていない隙間を語る」という言葉の本質を生かした弁証的連鎖であるが、これは、自分で様々な考える力をこそ与えるものであり、その先は子供たちに任されるものであるから。それで、情動の問題も解決するなら一石二鳥であろう。心の教育に忍びこみがちな政治的意図に侵される心配も無い。検討会では、家庭環境、食育、脳、など様々な視点から情動の教育を考えているが、言葉の連鎖を進める家庭環境、食育、etc.という視点から捉え直してみてもどうだろう。言葉の連鎖は隙間を要求する—隙間が無いなら言葉も不要だ—。言葉の連鎖こそが一次的で、「健全な情動」は恐らく言葉の連鎖の「結果」であるのに、この「結果」を先取りして子供に望むとしたら、それは順序の転倒であり、大人と子供の隙間を埋め、言葉の連鎖を阻害するものとなる。それはまた、子供において更に「キれる」こと、大人の理想への屈服、神経症の増加をもたらしかねまい。子供の言葉を飛び越して、子供の情動を直接どうこうしたくなったら、その自分自身の欲望をこそ分析すべきかもしれない。子供に語らせてしまうと理解の超えたことを言われてしまうのを恐れているのではないか、自分の不安をこそ埋めたいのではないか…等等。

註1 「情動の科学的解明と教育への応用に関する検討会 報告書」文部科学省のホームページより。

註2 ラランシュ・ポンタリス、(村上仁監訳)『精神分析用語辞典』みずく書房、1977

みずかみ・まさとし(臨床心理士)

ブレーキを踏もう

佐藤良平

連載 23 何のためにテレビ放送を変えるのか

テレビ放送を視なくなった私にとっては最早どうでもいい話題なのだが、テレビの行く末に対する懸念は強くなる一方である。地上波テレビ放送がデジタル化され、2011年にアナログ放送が終了すると決まっているからだ。これは既定の国家的政策であり、今さらブレーキを床まで踏みつけたところで、まず絶対に引っくり返らない。だからといって放って置いて良いというものでもないから、ここで扱っておきたい。

うんと平たく言えば、従来のアナログ波による放送のみに対応したテレビ受信機をそのまま使い続けると、2011年限りで一切テレビ番組が映らなくなり、ただの粗大ゴミになってしまう。2011年以降もテレビの視聴を続けたいと思ったら、デジタル地上波に対応した新型テレビを買うか、デジタル地上波の電波を受けて在来のテレビ受信機で視聴することができるようにする装置（コンヴァータ）を買って取り付けるしかない。テレビ本体を丸ごと買い直すか、それともコンヴァータと受信アンテナを買うだけで済ませるか、それは個々の視聴者の選択に委ねられる。確かなのは、大なり小なりの出費を覚悟しなければ現在と同じようにはテレビ番組を視られなくなるという事実だ。このことはご承知だろうか？

お役所の言い分はこうだ。簡単に言うと、アナログ波のテレビ放送は電波を贅沢に使うが、使用可能な電波の総量には限界がある。特に携帯電話などのモバイル機器に電波を割り当てなければならなくなって以降、使える電波の空き容量がガタ減りし、先行きが心許なくなってきた。そこで、今まで贅沢に電波を使って放送してきたテレビの電波は小さく折り畳んでもらって、空地になった部分をモバイル用に回しましょう、というわけだ。

デジタル化の釣り文句は、いろいろある。デジタル化すればテレビの画質が良くなりますよ。音声もサラウンドで聴けるようになります。お手元のリモコンを使って簡単にショッピングしたり、番組の中で行われる人気投票に参加できるようにもなります。普通の番組の他に、いつでもニュースや天気予報が見られます。番組表も画面上で見られます。

つまり、デジタル化のメリットは高品質化と高機能化ということになる。それを喜ぶ人たちが、果たしてどれだけ存在するだろうか？画質や音質が上がって喜ぶのはごく少数のマニアだけであって、マジョリティは有難味が分らないし、そんなことを気にもかけない。大多数のユーザ（普通の人々、と言い換えても構うまい）は、画や音の品質が上がるよりも、使い勝手が良くなってラクができるようになることを重視する。単に暇潰しでドラマやバラエティ番組を視たいだけなのに、必要以上の画質や音質が付いてきたり、ロクに使いもしない機能が上乘せされたりしても、積極的に歓迎する者は少ないだろう。

基本的にテレビというものは適当に視る、時計代わり、あるいは視る気半分でつけっぱなしにして流しておくものである。そうした需要態度は、今までテレビ業界が長年かかって視聴者を誘導してきた結果として形成された行動様式だ。したがって、ある時点を境にテレビ放送が高品質化・高機能化しても、それに応じて視聴者がテレビを視る時のスタイルがいきなり激変するとは期待できない。ハードウェアや伝送システムが高度化したところで、世間でテレビに対して期待している役割は一朝一夕に変るものではない。

また、高品質だったり高機能だったりする番組を作るには、それ相応の予算が必要になる。だが、高品質化・高機能化を喜んで享受する視聴者がどのくらいいるのかわからないのに、制作者なりスポンサーなりが今までより多い予算を番組制作に投じるようになるのかわかには重大な疑問がある。早晚、費用対効果の面で破綻するのは明らかだ。

高品質化や高機能化について言うなら、例えばDVDなどのビデオソフトや、スーパーオーディオCDなどの音楽ソフトであれば、割増しされた品質や機能に対して買い求める人間が納得した上でお金を出し、いわば受益者負担に基づく差別化であるから、何も不都合がない。しかし、テレビ放送というのは個人があれこれと選択できるシステムではなく、一方的に受け容れるしかない、ある意味で強制的なシステムである。必要以上の高品質化や高機能化を一方的に視聴者へ押し付け、それらへの対価として新しい受像機やコンヴァータへの出費を強要するのが、より多くの国民を幸福にする施策であるとは思えない。

テレビ放送のデジタル地上波への移行は、視聴者（消費者と言ってよい）の都合を尊重したのではなく、行政からの押し付けによって行われる。行政は視聴者の意見を取り入れる努力をしたのだろうか？ 少なくとも、彼らは私のところへ意見を聞きに来なかった。それで「ハイ、アナログ地上波はお終い」と勝手に決めてしまうのだからお話にならない。「いえ、テレビを買い換えてまで視たいと思いませんから」と言いたくもなる。

アナログ放送の終了によって真っ先に危機に陥るのは、いま現に情報弱者と呼ばれている人々だ。新型テレビやコンヴァータを買えない人、リモコンの方向キーや決定キーをうまく使えない人、ブルダウン・メニューから選択する操作ができない人、現行のアナログ放映で品質的に、また機能的に何ひとつ不満を感じていない人。こうした人々は地上波のデジタル化によって何ら利益を得られないどころか、逆に不利益を被る惧れが大きい。

テレビが最大の楽しみになっている人は多い。そして、そういう人は今後しばらくのあいだ増え続ける。彼らとは無縁のところでは生じた不都合によって、彼らの楽しみが奪われたり、彼らの負担が増えたりするのは、本当に善であるうか？ 私には、そう思えない。

憂慮すべきなのは、アナログ地上波の終了に伴ってテレビを視ない人が増えると、彼らが最低限知るべき情報が正常に伝達されなくなることだ。最も深刻なケースは、人命を左右するような自然災害や大規模な事故に関する情報である。テレビやラジオ等のメディアが存在しているのは、いざ緊急事態が発生した時、必要な情報を末端の国民まで滞滞なく平等に伝えるのが最大の目的だ。そうでない場合、いわば平時における放送メディアは、クルマのエンジンでいえばいつでも回転を上げられるようにアイドリングさせておく程度の意味しか持っていない。なのに、末端の視聴者がテレビの受信を諦めたせいで肝心な情報が伝わらなるとすれば、それは放送メディアの存在意義を揺るがす大問題である。

このようなことを言い出すと「それは大変だ。じゃあ弱者は公金を投じて救済しましょう」という論が出てくるかも知れない。それが実現されれば「メディアのあり方を公平に保つ」という美名に隠れて、巨額の税金が家電業界や放送業界に流れる結果となる。正にマッチポンプであり、そこでテレビ放送のデジタル化が利権として完結する。こうした事情をテレビが報じるだろうか？ 私が業界関係者なら、一切の情報を圧殺するだろう。 さとう・りょうへい（文筆業）

ヨーロッパ美術紀行 （21）

カラヴァッジョに魅せられて 5

清水由美子

慈悲の七つの行い（ナポリ）



《聖マタイ》連作以来、カラヴァッジョのローマでの順風満帆の制作活動は7年ほど続いた。現在は共にドイツにある忘れがたい《勝ち誇るアモール》や《聖トマスの不信》、ヴァチカン絵画館蔵の《キリストの埋葬》、聖堂から受け取り拒否されるもルーベンスの斡旋でマントヴァ公が買い上げることになる《聖母の死》（ルーヴル美術館蔵）などの傑作が次々とものにされたが、絵を描いていないときの行動は目に余るものとなっていた。ライバル画家を中傷する、警官を侮辱する、石を投げる、皿を投げる、女を巡って公証人を斬りつける、刀剣を不法所持する。投獄・裁判沙汰になっても熱心なコレクターである枢機卿たちやそのコネクションで救い出されるので囚に乗っていたのだろうか。しかし、1606年の春のある日、ついに一線を越えてしまった。賭テニスを巡り喧嘩の相手を殺してしまったのである。死刑宣告が出され、カラヴァッジョの逃避行が始まった。数ヶ月の潜伏を経てナポリに現れる。

ナポリはそもそもギリシャ人が開いた植民地で、その後ローマ、ノルマン、フランス、スペイン人・・・と次々と交代する支配者を戴きながらも栄え、1860年のイタリア統一以降凋落するという複雑な歴史を辿った町だ。カラヴァッジョの時代は、スペインのナポリ総督が支配する属州で、サイズではローマの3倍、人口30万人ほどで、ヨーロッパではパリに次ぐ大都会であった。富と優雅を誇示するスペインの支配階級と並んで、地方から流れ込んできた貧者や、兵士や郎党たちが社会の底辺にあふれていた。反宗教改革のナポリでは慈善活動が盛んだったが、7名の若い貴族のグループも、7つの慈悲の実行と聖堂の建立を企てた。ピオ・モンテ・デラ・ミゼリコルディア（慈愛の聖山）聖堂である。1606年に完成し、祭壇画《慈悲の七つの行い》の制作はカラヴァッジョに委ねられた。栄誉ある注文だった。ナポリに今も残るカラヴァッジョの大作である。何よりもこれに対面したくてナポリまでやってきた。

カラヴァッジョが赴いてから400年経った今のナポリは、ローマ、ミラノに次ぐ3番目に大きな都市ではあるのだが、旅行者にとっては好き嫌いが分かれるところらしい。マフィアの人ナポリ版カモッラによる犯罪、スリやひったくりの頻発、めっちゃくちゃな交通事情、とくれば二の足を踏みたくなるが、もはや普通の都市並みになってきているとも言われる。それでも、昨年7月のイタリア旅行でベニスから順々に南下してきてナポリ中央駅に着いた時は、駅と目の鼻の先にあるホテルに飛び込むまでの間もけっこう緊張したものだ。

翌朝タクシーでピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディア聖堂に直行する。車に交じって自由自在に走りぬけるスクーターがいつ乗り上げてくるかわからないような歩道をおちおち歩いてはられないし、その後丘の上のカポディモンテ美術館に連れて行ってもらつつもりでタクシーに乗り込んだのだが、きわどい運転操作に何度もひやりとする。数ミリのすきまで追いつくなんて、と色めくと、「慣れてるんで」と事もなげだ。

《慈悲の七つの行い》は、カラヴァッジョらしく、ナポリの市井の人々をリアルに描き出していて、その主題にもかかわらず宗教くささがないのがいい。あくまでも率直で人間的だ。ローマでは理想化することを知らぬ直截な表現が崇高さに欠けるものとされ聖職者の不興を買い、たびたび作品の受け取り拒否となった。後にブッサンは、カラヴァッジョを「絵画を破壊」した男と評している。

七つの善行はマタイ伝に拠るものらしく、右側には牢獄の鉄格子に顔を押し付けて若い女の乳房を吸う老人が描かれる。えっ、これが慈愛？—そう、たじろいではいけない。処刑を待つ老人キモンは食物を与えられておらず、訪ねてきた娘ペロが乳を与えて孝行するという「ローマの慈愛」はルーベンスも描いている。他には、埋葬するために死者を運びだす男、半裸の男に自分の着物を切り分け与える着飾った美男の騎士、巡礼者に宿を提供する男などが見て取れ、それらの善行を上空から二人の天使とマリア、そして幼いキリストに見立てられた可愛いナポリ子供が見下ろしている。

4メートル近い縦長のキャンバスに大勢の人物がぎゅうぎゅうに詰め込まれていて、画面構成としてはちょっと危なっかしいような気もするのだが、これはカラヴァッジョがじっくり腰を据えて制作に取り掛かれなかったから？ナポリで暖かく迎えられていたとはいえ、お尋ね者の身だ。比較的短時間で仕上げられたらしいし、事実、ナポリを後にし、マルタ、そしてシシリアへと逃避行を続けた先々で傑作を残していったが、これらの彼の最後の作品群は、ミラノの《果物籠》の精密さはもうなく、空間が広く取られ筆致も速く、その分技巧より内面性が深まっているように思える。図版で見る限りは、だが。昨年のロンドンのナショナル・ギャラリーでの「後期のカラヴァッジョ」展はナポリ時代以降の作品群の再発見を促すものだったが、傑作の誉れ高い《洗礼者ヨハネの斬首》はマルタのサン・ジョヴァンニ大聖堂を離れるころはなかったから、いずれ現地まで飛んでいくしかないと思っている。

それにしても、近年のカラヴァッジョを巡る展覧会、出版物の盛況はめざましい。もうすぐアムステルダムでは「レンブラントとカラヴァッジョ」展が始まる。レンブラント生誕400周年記念の目玉だが、プレスリリースを読む限り、カラヴァッジョの方がむしろスター扱いである。17世紀、ローマで、ナポリで、そして遠くネーデルラントでカラヴァッジョのスタイルは熱心に真似された。いわゆるカラヴァジエスキヤナポリ派である。カラヴァッジョ人気にあやかって彼等も脚光を浴び展覧会にひっぱり出されてきている。今度のアムステルダムでの展覧会は、レンブラントのみならず、ルーベンスやペラスケスなどの巨匠へのカラヴァッジョの影響を探る契機になるのかもしれない。楽しみである。

しみず・ゆみこ（ブリュッセル在住）

EUROCLINIQUE.COM
ユーロクリニック美容外科 TEL 0120-955-111

TOKORO ZAWA Japon

NICE France

〒359-1123 静岡県沼津市1-1-1 美さ各館2F 3F

『藤田博史・マンスリー連続対談シリーズ』
第12回

ゲスト： 松岡正剛（編集工学研究所所長）

テーマ：編集文化と日本人

2006年4月20日（木）19:00～22:00

カフェ・バー『CREMASTER（クレマスター）』2階

東京都新宿区歌舞伎町1-1-5 花園ゴールデン街

定員：10名 入場料：2,000円（1ドリンク付）

予約：電話での受付になります（予定数になり次第受付終了）

EUROCLINIQUE ユーロクリニック文化部 tel:042-308-7637(10:00～19:00)

CREMASTER クレマスター tel:03-3203-3620(19:00～23:30 祝祭日を除く)

松岡正剛（まつおか せいこう）：編集工学研究所所長、帝塚山学院大学教授。1946年京都市に生まれる。俳号は玄月。20代で雑誌『遊』を創刊。科学、アート、文芸を自在にリンクする、他に類を見ない雑誌として業界に多大な影響を与えた。1987年編集工学研究所を設立、情報文化と情報技術を繋ぐプロジェクトを手がける。著書は『概念工事』『知の編集術』『知の編集工学』『情報の歴史を読む』『空海の夢』『花鳥風月の科学』『遊学』『フラジャイル』『ルナティックス』ほか多数。

藤田博史（ふじた ひろし）：精神分析医、麻酔科医、形成外科医。1955年京都市に生まれる。信州大学医学部卒。フランス・ニース大学文学部哲学博士課程、医学部精神医学および医学的心理学専門課程（フランス政府給費留学）を経てバスツール病院医師。現在ユーロクリニック院長。日仏会館で公開セミナー「心的構造論」を講義。著書に『精神病の構造』『性倒錯の構造』『幻覚の構造』『人間という症候』、翻訳にジャック・ラカン『テレビジョン』等がある。

2001年から2003年まで開催された精神分析医藤田博史による
公開セミナー「人形の身体論—その精神分析的考察」より
当時「ドール・フォーラム・ジャパン」誌にリアルタイムで連載された講義録
「人◇形◇愛の精神分析～人形とは何か？・・・他者の身体の謎に迫る～」が
いよいよ単行本になります！

藤田博史 著 『人形愛の精神分析』

2006年3月23日 青土社より発売

定価 2,200円

SÉMINAIRE OUVERT PERMANENT

mars 2006 No.24-43

『セミナー通信』フリーペーパー版 2006年3月号

発行 EUROCLINIQUE 編集 ユーロクリニック文化部 榊山裕子

tel: 042-308-7637 E-mail: ys@euroclinique.com

メールマガジン版もあります。E-mail: seminaire@mac.com までお申し込み下さい。